

## 高層ビルのほとんどが「ぬけ上がり現象」 賠償責任も干潟を埋め立てた清新町の「液状化被害の調査・報告勉強会」で！



校庭に噴砂や液状化で亀裂が走った清新第一中学校

5月29日（日）午前10時から、北小岩コミュニティ会館でスーパー堤防・街づくりを考える会主催の勉強会が開かれました。初めに「会」メンバーの渡邊拓美さんによる「高台のニュータウンで液状化被害―私が見た清新町の調査レポート、続いて松丸幸雄、中井章夫さんらの小岩相撲甚句会による相撲甚句の披露がありました。当日の模様を報告します。

3月の東日本大震災は、江戸川区にも液状化被害をもたらしました。荒川河口に位置する清新町です。ここは荒川左岸の堤防に沿って盛り土して、約5m高台にした「近代的」な街、スーパー堤防とセットになった街づくりのモデルケースといえる所です。皮肉なことに高台の街に噴砂現象が集中したのです。

その理由は清新町の成り立ちにありました。町の土台は昭和47年から10年かけて造られた埋立て地です。それ以前は干潟になっていました。

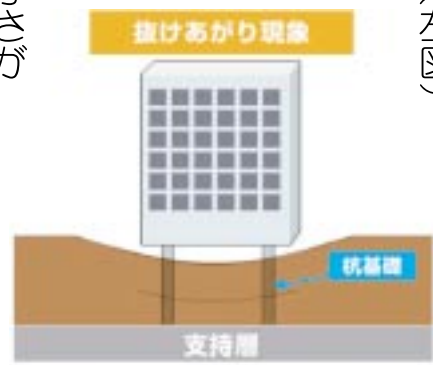
埋め立てはポンプ船による浚渫で、近くの海底の砂を埋立て地に流し込んだのです。近場から必要な土砂を供給でき、コストを安くできますが、液状化が起きやすい水を多く含んだ層を造ってしまいます。砂を観察すると粒は細かな、大きさの揃ったものでした。

清新町はバブル景気前夜に埋め立てが完成し、バブル期に「近代的」な街に変貌していきました。街は埋立て地の上に盛り土を重ねる、軟弱な人口地盤の二段重ねになっているのです。



北側が沈んで傾いた一戸建て

今回の液状化で一戸建て住宅は沈んで傾いています。多くの高層住宅は、深刻な支持杭の「抜け上がり」を起こしています。（左図）



ウレテックジャパン(株)HPより

このあたりは軟弱地盤の厚さが50m近くもあり、支持杭も長く、振動で損傷している可能性もあります。埋立て地は地盤が安定しにくく、20年、30年では固くなりません。そこに厚く重い盛り土を乗せ、無理やりニュータウンを造ってしまったのです。

これはスーパー堤防にも共通する問題です。江戸川区には説明責任はもちろんのこと、場合によっては賠償も生じるような問題と恐れられます。税金をムダなスーパー堤防建設ではなく、本物の復興と防災のために有効に使って欲しいものです。

安中茂作の  
スーパー川柳  
第六十七弾

人は土堤  
人は石垣  
人は人